

志比口と勝山街道

(幕末には鉄砲製造所も置かれた勝山街道の起点)



芝原用水に架かる荒橋。欄干は特徴あるデザインとなっている

鉄砲製造所跡に建立された川上神社



追分三叉路
左が勝山街道、右は永平寺へ



江戸期の福井城下には、域外に通じる「福井七口」と称される出口があり、代表的なものに、大聖寺方面に向かう加賀口、府中(武生)に向かう赤坂口(大橋口)、大野に向かう勝見口、三国に向かう牧野島口などがあつた。

志比口もその一つで、松岡、勝山、永平寺に向かう勝山街道の起点となつていた。勝山街道は、福井城下の生命線ともいべき芝原用水に沿っているのが特徴で、用水取得口のある松岡までは、並行していた。

起点となる志比口の芝原用水にかかる荒橋は、松本通りから進むと、新幹線等の高架を過ぎた直ぐのそこ

ろで、川上神社の斜め前にある。

昭和27年にコンクリートで竣工している。県内では、昭和20年代にはまだ5割が木製の橋であつたが、その後急速にコンクリートでの永久橋化がすすむ。この時期、松岡までの道路の改修が行なわれており、これに合せての橋の架替えであつた。橋の親柱には、「荒橋」「芝原用水」「昭和二十七年三月竣工」などの文字が読み取れる。

明治後期から大正初期、この街道に乗合馬車が運行され、荒橋詰の待合所として利用された「茶所」は賑わい、人力車も利用されていた。しかし、大正3年京都電灯により新橋

井く市荒川間に越前電鉄が開業し、勝山、大野へ延伸すると、乗客は電車へと移り、馬車運行は廃止となつた。電車は、現在は「えちぜん鉄道勝山永平寺線」となり、荒橋詰めには福井口駅が置かれている。

また、この地は幕末に福井藩が洋式鉄砲製造所を設けた所でもある。大規模な製造所の必要性が高まり、安政4年11月、藩士の佐々木権六を頭取、三岡八郎を副として、銃器生産に取り組んだ。敷地1,400坪、建物300坪で、動力としては用水を利用した水車を活用した。閉鎖するまでに小銃約七千挺を製造したと伝わる。現在その跡地には川上神社

が松岡から移され、建立されている。

勝山街道は、この荒橋から、芝原用水にそつて東進する。現在の松岡菅谷線(以下新道と表記)に並行しており、道路は改良されているものの、当時の街道筋を辿ることができ。途中で新道と重なりながら進むと、上中町の交差点からは再び昔の面影が残る旧道が残り、さらに進むと、永平寺道への追分分岐点に到達する。ここには、永平寺道への道標が残されており、三叉路には古い標柱も置かれており、勝山街道は、この分岐点を左に進み、一度新道に出た後、島橋地区で再度旧道に入り松岡に向かう。(文 奥山秀範)